

## 近世日本における鼠の飼育書

—『養鼠玉のかけはし』(二七七五)・『珍翫鼠育艸』(二七八七)を題材として—

横 田 悠 紀

はじめに

近年、ペットをめぐることは、捨て犬や捨て猫の問題、フアッション感覚での飼育など様々な問題が生起し、人間と動物の関係を顧みる必要に迫られている。こうした問題にアプローチする方法として、歴史的な観点から現在を批判的に捉える営為は一つの有効な手段であろう。その意味合いにおいて、本稿では、近世日本において刊行された『養鼠玉のかけはし』(二七七五)、『珍翫鼠育艸』(二七八七)という二点の鼠の飼育書に着目したい。

ここで先行研究について述べると、先鞭をつけたのは寺島俊彦氏である。氏は『珍翫鼠育艸』の本文の翻刻と現代語訳を行い、現代の鼠の飼育法と比較しながら解説を付した。さらに鼠の繁殖に関しては、『珍翫鼠育艸』に記され

る掛け合わせの殆どが、現代の遺伝学で用いられる遺伝子型を用いて説明できることを証明した<sup>1)</sup>。

続いて、上野陽里氏は科学と技術という観点から『珍翫鼠育艸』を論じ、科学としての解析には欠けるが遺伝の法則をいち早く捉えた文献であると評価している<sup>2)</sup>。同様に、金子之史氏も『珍翫鼠育艸』をメンデルの遺伝の法則に先立って遺伝に関する交雑実験を述べた日本で最初の書物と指摘し、そこに文化的な価値を見ている<sup>3)</sup>。また、庫本高志氏は現在の実験用マウスのルーツを探る手掛かりとして『養鼠玉のかけはし』を利用した<sup>4)</sup>。

このように、先行研究において『養鼠玉のかけはし』と『珍翫鼠育艸』は、科学および遺伝学的観点から論じられてきた。他方、作品の内容分析や背景の追究、或るいは出版の

位置づけ等、歴史的、文学的、思想的観点からの研究はほとんどみられなかった。

こうした状況の中、初めて文学・思想史的な側面に踏み込んだ安田容子氏は、『養鼠玉のかけはし』の著者である「浪花 春帆堂主人」が、大坂島之内の松原町在住の春木幸次であると特定し、さらには美術史の研究成果に目配りすることで、同書の画工「皎天斎主人」が大坂狩野派の絵師橘邦雄であることをつきとめた。加えて、「奇品」と称された珍しい毛色の鼠に関して、『養鼠玉のかけはし』と『珍翫飼育艸』の両書の比較を行った点、ならびに『養鼠玉のかけはし』が単なる飼育書ではなく狂歌絵本としての性質も併せ持つことを指摘した上で、鼠の飼育と狂歌師の関わりについて考察を行っている点で、新しい地平を切り開いたと言える。

ただし、『養鼠玉のかけはし』と『珍翫飼育艸』本文の典拠が追究されていないことや、両書の内容構成全体を通じた比較が行われていないことから、これらの作品分析や歴史的位置づけは、いまだ十分であるとは言い難い。

以上を踏まえて、本稿では同時代の歴史的背景や学問的潮流を押さえながら、『養鼠玉のかけはし』、『珍翫飼育艸』の典拠の解明、ならびに作品全体の比較を行う。これらの作業によって明らかになった差異を通して、両書的位置づ

けを定めることがその狙いである。

#### 一、各種動物飼育書の刊行

近世も中期になると、趣味や娯楽としての動物飼育は為政者層にとどまらず、生活に余裕のできた下級武士や町人の間にも広がりを見せ、鳥や犬、猫、金魚、秋の虫など様々な生き物の飼育が試みられ、各種の飼育書が刊行された<sup>7)</sup>。

近世の養鼠書を論じるにあたり、まずはどのような飼育書出版の潮流の中でこれらが上梓されたのかを踏まえておくことは必要であろう。よって、本章では近世における動物飼育書の刊行状況を見ていく。なお、馬や牛、鷹、蚕など、農業、産業、狩猟ならびに通行のために使役された動物の飼育書は多数存在するが、ここでは「愛玩」を目的とした鳥類、金魚、狎・犬全般の飼育書を対象とする。

はじめに鳥類について述べる。近世に刊行された鳥類の飼育書を成立年順にまとめたものが表1である。

管見の限り、日本で刊行された最初の飼育書は、『鶉書』(二六四九刊)である。よく鳴く鶉の選別方法や、病気の治療法などが問答形式で述べられている。『鶉書』に次いで刊行された『喚子鳥』(二七一〇刊)は、初めに一般的な鳥の飼い方を記し、その後様々な鳥を紹介している。

表1 近世刊行の鳥類飼育書

通番	書名	成立	著者
1	鶉書	慶安2年(1649)刊	蘇生堂主人
2	喚子鳥	宝永7年(1710)刊	蘇生堂主人
3	百千鳥	安永2年(1773)刊	城西山人
4	百千鳥	寛政11年(1799)刊	泉花堂
5	春鳥談	弘化2年(1845)刊	隅田舎主人

※日本古典籍総合目録、細川博昭『大江戸飼い鳥草紙 江戸のペットブーム』表6を参照して作成した。

版が自粛されたと考えるのが自然であろう。

再び出版が行われだした中で、城西山人『百千鳥』(一七七三刊)が上梓される。本書は、唐蘭船によって持ち込まれた外国産の鳥類のみを扱った唯一の刊本である。上巻はインコやハトなどの類、下巻では孔雀などの大型の鳥

ここで表1、表2を確認すると『鶉書』を除いた飼育書全般の成立年はすべて宝永七年(一七〇八)以降となっていることが分かる。『鶉書』の刊行以降、貞享四年(一六八七)から宝永六年(一七〇九)にかけて、徳川綱吉により一連の「生類憐みの政策」が行われている。この間、政策の一つとして実際に出された町触に、慰み物として鳥類や虫を飼育する事を禁じた御触れが確認できる。このような状況下では飼育書の需要が見い出せないため、出

類、合わせて六十五種の飼育法を紹介する。その成立から二十六年後、泉花堂により同名異書の『百千鳥』が刊行される。泉花堂の『百千鳥』は近世もつとも流布した鳥類の飼育書の一つとされ、版本にとどまらず写本も多数確認できる。これらの刊本に加え、「諸禽万益集」(享保二年〔一七一七〕冬十五日奥書)や「飼籠鳥」(二八〇八序)をはじめとした写本も多く確認されているように、近世における鳥の飼育状況とそれに伴う飼育書の需要が窺える。

次に金魚の飼育書を見てみよう。表2のとおり、日本で初めて刊行された金魚専門の飼育書は『金魚養玩草』(二七四八刊)である。『金魚養玩草』は、何度も重版を重ねるなど広く流布した<sup>10</sup>。最終的には弘化三年(一八四六)まで版を重ねており、金魚飼育が長期にわたり人気を博したことは想像に難くない。しかしながら、金魚の飼育書の種類は少なく、現存するものうち刊行されたものは表2に示す三書のみである。その他「金魚の飼様」や「金魚養書」などの写本も複数確認されているが、これらは刊行された三書の写本であると目される。

最後に狎・犬全般を対象とした飼育書にも触れておこう。塚本学氏によると、近世に愛玩犬として主流となっていたのは狎であり、狎は犬全般とは区別されていた<sup>11</sup>。そのため狎の飼育書である「狎飼方薬方秘伝」、「狎飼養書」、「狎

表2 近世刊行の金魚飼育書

通番	書名	成立	著者
1	金魚養玩草	寛延元年 (1748)	安達喜之
2	金魚秘訣録	寛延2年 (1749)	安達喜之
3	金魚名類考	寛政8年 (1796)	観魚亭

※『玉川鮎御用中日記・氷曳日記・松江漁場由来記・釣客伝・金魚養玩草』解説を参照して作成。

な動物であった。様々な文献に鼠は登場し、そこでは遷都に先立って都を移動するなどの予知能力を持つ不思議な存在として<sup>12</sup>、或いは大黒天の使わしめとしてなど神秘的な存在として<sup>13</sup>、時には現在同様の忌むべき存在として描かれている<sup>14</sup>。ところが、近世に入ると鼠は人間の欲望を満

育様及療治」の三冊とは別に、犬全般の飼育書として『犬狗養畜伝』（江戸後期成立）が刊行されている。曉鐘成によって刊行された『犬狗養畜伝』には、犬を飼う心構えや、犬の病気や怪我の治療法が記されている。この書は犬用の薬の販促として利用された点で他の飼育書と性質を異にする。

以上、近世には「愛玩」を目的とした各種動物の飼育が流行し、それに伴って飼育書が成立していた。そして鼠もまたその例外ではなかった。

## 二、『養鼠玉のかけはし』

古代から鼠は人間にとって身近な動物であった。様々な文献に鼠は登場し、そこでは遷都に先立って都を移動するなどの予知能力を持つ不思議な存在として<sup>12</sup>、或いは大黒天の使わしめとしてなど神秘的な存在として<sup>13</sup>、時には現在同様の忌むべき存在として描かれている<sup>14</sup>。ところが、近世に入ると鼠は人間の欲望を満

たす娯楽となる。すなわち、見世物とされたり<sup>15</sup>、購買できる商品となったのである。

例えば、元禄三年から五年（一六九〇〜九二）にかけて来日したオランダ商館付医師エンゲルベルト・ケンペル (Engelbert Kaempfer) の死後、一七二七年にロンドンで英訳刊行された *The History of Japan* (『日本誌』) の草稿である *Heutiges Japan* (『今日の日本』) にも鼠と芸に関する観察が見られる。

鼠や二十日鼠は、物凄く多い。馴らされた二十日鼠は、いろいろの芸をやる。二十日鼠の芸は、貧しい人々の娯楽でもあり、暇つぶしにもなる。とくに大坂では見せものになっている。大坂には、珍しいものを陳列したり、木戸銭をとって遊芸を見せる全国の見世物小屋が集まっている<sup>16</sup>。

このように鼠が資本主義経済に組み込まれるに伴って養鼠書の出版も始まり、現在まで『養鼠玉のかけはし』（二七七五刊）と『珍翫鼠育艸』（二七八七刊）の二点が確認されている。本章では、先に上梓された『養鼠玉のかけはし』を取り上げ、内容構成や典拠を分析する。

『養鼠玉のかけはし』<sup>17</sup>は、安永四年（一七七五）正月

表3『養鼠玉のかけはし』目次

通番	章題	備考
上巻		
1	序文	図1点あり
2	鼠の言われ、ことわざ、出版意図	図6点、狂歌4首あり
3	鼠の語義	
4	鼠の姿の説明	
5	鼠の食べ物	
6	鼠の故事	
7	鼠の呼称	
8	薬になる部位	
9	鼠に噛まれた際の治療法	
10	鼠の類	
11	鼯鼠	
12	鼯鼠	
13	鼯鼠	
14	竹鼯	
15	土撥鼠	
16	貂鼠	
17	黄鼠	
18	鼯鼠	
19	鼯鼠	
20	食蛇鼠	
21	鼯鼠	
22	鼯鼠	
23	鼯鼠	
24	鼯鼠	
25	水鼠	
26	氷鼠	
27	火鼠	
28	鼯鼠	
29	鼯鼠	
30	香鼠	
31	鼯鼠	
32	鼠の字を用いるが、鼠でないもの	
下巻		
33	鼠の良し悪しの見分け方、病鼠の治療法	図1点、狂歌1首あり
34	鼠の繁殖方法	
35	鼠の餌	
36	熊鼠について	図3点、狂歌1首あり
37	豆鼠について	図2点、狂歌1首あり
38	斑鼠について	図3点、狂歌1首あり
39	狐鼠について	図1点、狂歌1首あり
40	とつそについて	図1点、狂歌1首あり
41	奇品について	
42	樊について	図1点あり
43	鼠の懐け方	
44	鼠の売買	

刊行の二巻二冊の半紙本の書物である。著者は春帆堂主人とされ、版元は江戸の山崎金兵衛、大坂の荒木左兵衛、辻文助、彫刻は藤村善右衛門、藤村安兵衛、皎天齋主人書図となっている。本書は上下二冊から成り、上巻では鼠と「鼠

の属たぐひ」の解説、下巻では鼠の良し悪しの見分け方や繁殖方法などが述べられる。上下巻ともに目次がないため、本文の一つ書き（頭は○で記されている）ごとに任意の項目題を付け目次を作成した（表3）。

第一項の養鼠訣序と題された二丁にわたる漢文序文は、隷書をさらに崩したような独特の書体<sup>18</sup>で記され、最後に鼠と遊ぶ少年の絵図が掲載される。以下、その翻刻を記す。

### 養鼠訣序

鼠月<sup>ニ</sup>乳<sup>ス</sup>十二子<sup>ニ</sup>。踰<sup>レ</sup>テ月<sup>ヲ</sup>而十二子<sup>又</sup>各乳<sup>ス</sup>十二子<sup>ヲ</sup>。合<sup>ニ</sup>計<sup>スル</sup>一歳所<sup>ニ</sup>。凡<sup>ニ</sup>百億<sup>万</sup>。数<sup>ニ</sup>家可<sup>レ</sup>説<sup>ル</sup>。取<sup>ニ</sup>喻<sup>ヲ</sup>于此<sup>ニ</sup>。孕<sup>ノ</sup>之繁<sup>可</sup>以見<sup>ル</sup>焉。食<sup>レ</sup>麦<sup>ヲ</sup>食<sup>レ</sup>苗<sup>ヲ</sup>。人<sup>仍</sup>病<sup>レ</sup>諸<sup>ヲ</sup>。鼠<sup>輩</sup>鼠<sup>窃</sup>。孰<sup>解</sup>之<sup>萌</sup>嘲<sup>ヲ</sup>。尚<sup>何</sup>問<sup>ニ</sup>頤<sup>養</sup>之道<sup>ヲ</sup>。春<sup>帆</sup>子<sup>之</sup>訣<sup>。何</sup>諄<sup>々</sup>也。夫<sup>鼠</sup>性<sup>之</sup>慧<sup>者</sup>也。養<sup>ハ</sup>則<sup>易</sup>馴<sup>。古</sup>称<sup>ス</sup>鼠<sup>寿</sup>百<sup>歳</sup>。能<sup>知</sup>人家<sup>ノ</sup>吉凶<sup>。及</sup>千里<sup>外</sup>事<sup>。理</sup>或有<sup>之</sup>。鐘<sup>山</sup>蔡<sup>氏</sup>嘗<sup>嘗</sup>養<sup>ニ</sup>数<sup>十</sup>頭<sup>。呼</sup>来<sup>。即</sup>来<sup>。遺</sup>去<sup>。去</sup>即<sup>去</sup>。此<sup>ヲ</sup>為<sup>ニ</sup>養<sup>鼠</sup>之<sup>始</sup>。盖<sup>其</sup>為<sup>ル</sup>物<sup>。露</sup>眼<sup>速</sup>。視<sup>。克</sup>識<sup>ニ</sup>其<sup>主</sup>。樊<sup>籠</sup>雖<sup>設</sup>。放<sup>出</sup>無<sup>レ</sup>禁<sup>。掌</sup>上<sup>之</sup>玩<sup>。哺</sup>食<sup>安</sup>然<sup>。饋</sup>面<sup>圍</sup>憚<sup>シ</sup>。榮<sup>リ</sup>肩<sup>循</sup>領<sup>ヲ</sup>。而<sup>旅</sup>轉<sup>于</sup>衣<sup>袖</sup>間<sup>。其</sup>能<sup>会</sup>スル<sup>人</sup>意<sup>。執</sup>綆<sup>而</sup>立<sup>。脚</sup>書<sup>ヲ</sup>而<sup>走</sup>。指<sup>揮</sup>無<sup>レ</sup>不<sup>。如</sup>人家<sup>愛</sup>養<sup>。亦</sup>止<sup>ニ</sup>兒<sup>啼</sup>具<sup>ノ</sup>已<sup>。近</sup>時<sup>翫</sup>賞<sup>頗</sup>盛<sup>。比</sup>於<sup>樊</sup>禽<sup>池</sup>魚<sup>之</sup>清<sup>觀</sup>。於是<sup>品</sup>類<sup>ノ</sup>之<sup>区</sup>別<sup>。皮</sup>毛<sup>之</sup>純<sup>駁</sup>。養<sup>ノ</sup>之<sup>有</sup>二<sup>其</sup>術<sup>。愈</sup>出<sup>而</sup>愈<sup>奇</sup>。白<sup>鼠</sup>古<sup>ノ</sup>所<sup>謂</sup>瑞<sup>物</sup>也。今<sup>ハ</sup>即<sup>視</sup>以<sup>為</sup>尋<sup>常</sup>。時<sup>好</sup>多<sup>端</sup>。競

遂<sup>夸</sup>負<sup>。扇</sup>勅<sup>ス</sup>人間<sup>。販</sup>鼠<sup>之</sup>利<sup>。或</sup>至<sup>ル</sup>成<sup>ニ</sup>家<sup>。蓋</sup>無<sup>清</sup>世<sup>ノ</sup>餘<sup>澤</sup>。昇<sup>平</sup>樂<sup>事</sup>爾<sup>。而</sup>春<sup>帆</sup>子<sup>ノ</sup>訣<sup>。為</sup>所<sup>行</sup>也<sup>。吾</sup>且<sup>道</sup>之<sup>ヲ</sup>。昔<sup>樵</sup>公<sup>賦</sup>鼠<sup>而</sup>人<sup>称</sup>其<sup>性</sup>之<sup>黠</sup>。今<sup>也</sup>春<sup>帆</sup>之<sup>書</sup>出<sup>テ</sup>。而<sup>拳</sup>其<sup>性</sup>之<sup>善</sup>無<sup>レ</sup>遺<sup>。無</sup>乃<sup>為</sup>杜<sup>君</sup>雪<sup>上</sup>兔<sup>乎</sup>。籍<sup>令</sup>社<sup>君</sup>而<sup>有</sup>神<sup>。則</sup>涵<sup>蒙</sup>祉<sup>福</sup>。宜<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>期<sup>ニ</sup>乎<sup>斯</sup>人<sup>ニ</sup>焉<sup>耳</sup>。

安永甲午仲秋觀我生題<sup>19</sup>

冒頭、鼠は月に十二匹子供を生み、それを毎月繰り返し一年でとてつもない数となる上に、麦などの人間の食物を食べるので、人間に恨まれている存在であるとすると一般的な見解が示されている。続いて、中国の故事を引きながら、人家の吉凶や千里外の事を知ることができるという鼠の超能力について述べる。さらに鐘山の蔡氏に始まる養鼠の起源、鼠の人懐こさ、鼠を取り巻く昨今の状況が言及される。なお、鼠が人家の吉凶や千里外の事を知ることができるという話は、『和漢三才図会』（二七二自序）を典拠としている<sup>20</sup>。また、鼠が月に十二匹の子供を産むという設定の下にいわゆる「鼠算」の例えを提示する方法は、寛永十一年版『塵劫記』巻の四に確認できるものである<sup>21</sup>。ところで、この序文を記した觀我生なる人物はどのような

な人物であろうか。搜索した結果、観我生が『新選紙鑑』（二七七七刊）という書物において序文を執筆していることを発見した。現時点でそれ以上は不詳であるが、書物の序文を依頼される程度の学問的地位を有していたことが窺える。

続いて第二項では鼠のいわれや、鼠にまつわる諺、出版意図が述べられる。

又暇日ひろく同好に謀て。養鼠の一卷をつゞりて。我に求むるの勞に代んとす。「中略」絵にまじへて。おさないの。見やすからんずことをほりす。一応これをもてあそばんとならば。先此書に就て其養ふみちをかふがえ。やう／＼に此書をはなれて。養ひ得ハ。明月連城したがつて求むべし。此書のごとき。そがさちにす、む。かけはしならんかも

ここから『養鼠玉のかけはし』は鼠の育て方、繁殖方法の伝授を目的とした本であり、その対象には子どもが含まれていたことがわかる。安田容子氏は子どもが対象に含まれた背景として、白鼠の価値の低下を挙げる。その根拠として『居行子』後編（二七七九刊）の「白鼠はもはや珍しからず。値も下直になり家ごとに小児のなぐさみものとな

り」という文章を挙げ、『養鼠玉のかけはし』の刊行時期には白鼠が子どもの愛玩物となっていたことを指摘している<sup>22</sup>。

第三項では「鼠」という呼称の語源について記され、続く第四項から第八項では鼠に関する故事などが紹介されるが、これらの記述は、本文中に「本草に」と明記される箇所はもちろん、それ以外の箇所も大半は李時珍『本草綱目』を参照している。

さて、第九項では、「鼠に噛れたるにハ。胡椒の末を傳べし」と鼠に噛まれた際の治療法が教示されるが、このような事項は『本草綱目』にはみられない。この項は『和漢三才図会』の「鼠」の項目の解説文の一節「鼠ノ咬タルハ用テ胡椒ノ末ヲ傳ケレ之<sup>23</sup>」を典拠としている。したがって、執筆にあたり著者が『本草綱目』のみならず『和漢三才図会』を参照したことは間違いない。

第一〇項において「今本草に載る所の種類を記すること左のごとし」と述べ、後続の第一一項から第三二項にかけて「鼠の属」<sup>24</sup>の解説がなされる。「鼠の属」の掲載順は、基本的に『本草綱目』での順序に基づいたものである。『養鼠玉のかけはし』では、まず『本草綱目』「鼠部」で項目を立てて紹介された「鼠の属」——種を記し、次に「鼠部」の冒頭の「鼠」の項目の「附録」にて紹介された「鼠の属」

表4 「鼠の属」 典拠一覧

項数	本草綱目	和漢三才	大和本草
第11項	鼯鼠 <small>あんそ</small>	○	△
第12項	隱鼠 <small>いんそ</small>	○	
第13項	鼯鼠 <small>せきそ</small>	△	
第14項	竹鼯 <small>ちくもう</small>	○	
第15項	土撥鼠 <small>どはつそ</small>	○	
第16項	貂鼠 <small>てうそ</small>	○	○
第17項	黃鼠 <small>くわうそ</small>	(○)	
第18項	鼯鼠 <small>つうそ</small>	○	○
第19項	鼯鼠 <small>けいそ</small>	○	
第20項	食蛇鼠 <small>しょくじやそ</small>	(○)	
第21項	蝟 <small>る</small>	○	
第22項	鼯鼠 <small>しうそ</small>	○	
第23項	鼯鼠 <small>へいそ</small>	○	
第24項	鼯鼠 <small>りあい</small>	○	
第25項	鼯鼠 <small>きよせい</small>	○	
第26項	水鼠 <small>すいそ</small>	○	
第27項	氷鼠 <small>ひようそ</small>	○	
第28項	火鼠 <small>くはそ</small>	○	
第29項	鼯鼠 <small>とつそ</small>	○	
第30項	蟹鼠 <small>けつそ</small>	○	
第31項	香鼠 <small>かうそ</small>	○	
第32項	鼯鼠 <small>こそ</small>	○	

九種を順に記す。その後『本草綱目』には記載のない「香鼠」、さらには『本草綱目』では「禽部」に分類される「鼯鼠」の二項目が追記されている。

これら「鼠の属」の記述はその多くが『本草綱目』、『和漢三才図会』の二書を典拠としており、ごく一部に『大和本草』を典拠としている箇所もあることが判明した。項目

ごとに典拠が異なるため、該当項と典拠の関係を示した一覧を作成した(表4)。なお、記述の内容や文章構成から明らかに典拠と同意定できるものには○、一部引用にとどまるものは△で示した。また、「本草に委し」等の様に、典拠として示されているが説明が省略されているものは(○)の形で示した。



さらに、上記書籍に倣っているのは記述の内容のみではない。関連する項目の知識を古い書物から収集し、網羅的に記述するといった『養鼠玉のかけはし』上巻の作品構成もまた、『本草綱目』、『和漢三才図会』などの(百科)事典的な書物のスタイルを踏襲したものである。

以上が『養鼠玉のかけはし』の上巻の内容である。続いて下巻の内容を確認する。先にも述べたように、下巻では鼠の良し悪しの見分け方や繁殖方法などが述べられる。ただし、これらの情報は『本草綱目』や『和漢三才図会』などを出典としておらず、独自の記述となっている。

第三三項では白鼠を中心に鼠の良し悪しの見分け方、病鼠の治療法が記される。続く第三四項で鼠の繁殖法を詳しく述べた後、第三五項で鼠の餌について簡潔にまとめられている。その後、第三六項から第四〇項にかけて、「奇品」とされる珍しい姿や毛色の鼠が、狂歌とともに図入りで紹介される。

大坂城代の家臣として来阪した池田正樹が大坂滞在中に記した「難波噺」に「当地に白鼠多し。或る人云。常の鼠に地鼠を合すれば、白鼠を生ずるよしいへり。またとらふ紫其外種々の毛色を生ずるも、ミなつくりたるものなりと。然れども予いまだ其実を知らず<sup>25</sup>」と記されている。また、京都の豪商の次男百井塘雨が記した旅行奇談「笈埃随筆」

にも「此のごろ、鼠を遊ぶ事流布して、種々の奇鼠出す、白鼠は幸福の瑞なりとて是を崇みけるも、今は夥しく世に出て人更に顧ず。斑駁<sup>まだらぶち</sup>粉雜の鼠を出す。黑白の鼠をとつがしめて是を造る<sup>26</sup>」といった記述がみられる。この「とらふ紫其外種々の毛色」や「斑駁粉雜」は『養鼠玉のかけはし』で紹介される「奇品」の一種であったと考えられる。第四一項で「奇品」について、次のような著者の見解が示されていることは注目すべきである。

世に奇品の鼠の出るを。たとへば白鼠に熊鼠を合す時ハ生ずる所を斑鼠なりとおもふハ非なり。奇品の出るは別の事にて。必ず自然にまかせたるものなり。右のごとく毛色の異なるを合して生ずるを養鼠家にて土鼠と称じて下品とす。奇品の出る事ハ。人間の伎倆にあらず。造化の不測なり。さればこそ價を費して珍重せり。いつまでも白ハ白。斑ハまだらを偶して勢の奇遇と倣賞のやんごとなきに感じて。はからざるに。奇品の出る事。従来見及べり。是養鼠家の所謂せうねならずや

前述の「難波噺」と「笈埃随筆」では「奇品」は「つくる」ものとして紹介されている。この「つくる」という言葉か

ら意図的な産出が行われていたことは間違い無く、また、同時期に朝顔などの「奇品」の産出が積極的に行われていた<sup>27</sup>。一方で、『養鼠玉のかけはし』からは、故意に変わった鼠を作り出すことを推奨しない態度が読み取れ、同時代において、著者の態度は流行に背を向けるものであったとみることが出来る。意図的に作り出された「奇品」ではなく、自然に任せて生まれた「奇品」にこそ価値を見出し、いたのである。

第四二項では鼠を飼育する小屋である「樊」の大きさや素材について、第四三項では鼠を人に馴れさせる方法や鼠の芸について述べる。

最後に付された第四四項では鼠の売買について言及している。「右此巻にしるす所の鼠品ハ。方今直を定て。坊間に売買す。其家漸多しといへども。今左に載る所に就て求むれば。悉く購得らるゝなり。後の養鼠家此書に出入。更に奇品を獲バ。此売買舗に向て。其価を定むべし」との記述の後、「大坂鼠品売買所」として以下五ヶ所が挙げられている。

しんさい橋筋大宝寺西北角 十島屋仲七

さのや橋筋安堂寺町南入東側 本屋宇八

同筋しゅんけい町北よこ町西側 河内屋虎之助

同所 播磨屋幸助

内本町御陵筋ひがし 和田清左衛門

この記述から、鼠の飼育が当初は大坂を中心に広まったことが窺える。それを裏付けるように、冒頭に掲げたケネルの記述では、鼠に関して「特に大坂では見せものになっている」と述べられており、池田正樹は「難波噺」前篇で「当地に白鼠多し」と記すにとどまらず、同書後篇においても大坂に「多くあるもの」として白鼠を挙げている。上方から広まった白鼠の飼育は江戸にも普及したようであり、やや時代は下るが、商用で江戸に出ている父親に対して、子どもが土産に白鼠を頼む書簡が認められることなどは、その事実を裏付けていよう<sup>28</sup>。

このように、鼠を販売する店舗が多数存在することや、子どもが土産物として白鼠を所望していることは、鼠を対象とした商売が普及していたことを示している。その商品経済状況を踏まえた上で、鼠の飼育書である『養鼠玉のかけはし』の巻末に「鼠品売買所」の情報が記載されていることを吟味すると、本書が商売に伴う需要から刊行されたことを改めて認識させられる。

以上、『養鼠玉のかけはし』の典拠の搜索や内容構成の分析により、上巻は主に『本草綱目』と『和漢三才図会』

を典拠としていることが判明した。飼育書でありながら、それに関する情報のみならず、「鼠」という呼称の語源や、現在鼠には分類されない動物や想像上のものも含めた形で、「鼠」の情報を古い書物から収集し、網羅的に記述した書物であった。その作品構成もまた、『本草綱目』や『和漢三才図会』などの(百科)事典的な文献に倣ったものであった。また、同時期に「奇品」がもてはやされていたことを勘案すると、『養鼠玉のかけはし』下巻において、著者が意図的な「奇品」の産出を推奨しない態度を示したことは、とりわけ注目すべきものである。

### 三、『珍翫鼠育艸』

『珍翫鼠育艸』<sup>29</sup>は天明七年(二七八七)正月刊行、京都の書肆銭屋長兵衛板の一冊の小本である。定延子が序文を記しているが、著者は不明である。題箋には「ちんぐわんそだてぐさ」とルビが振られる。『養鼠玉のかけはし』と異なり、『珍翫鼠育艸』には「目録」と称した目次が付けられている(表5)。

表5 『珍翫鼠育艸』目次

通番	章題	内容	備考
1	しろねづみ 白鼠之はじまり	日本の白鼠の起源	蘇生堂主人
2	しよそ ぬみやう 諸鼠之異名	鼠の名称	図1点あり
3	しよそ ぬづ 諸鼠之絵圖	鼠の絵	図4点あり
4	ねづみとや わけをく 鼠 焚にて分置べき心得の事	妊娠した雌鼠の取り扱い	
5	こ うみ こころへ 同子を産候て心得とやの事	産後の注意点	
6	まめじろまめ 豆白豆ぶちの事	豆鼠の取り扱い	
7	にちへ しょかんくひもの 同日々并暑寒喰物の事	鼠の餌について	
8	同鼠つよくかふ事	鼠を丈夫に育てる方法	
9	くひもの よしあし 鼠喰物の善悪の事	餌の善し悪し	
10	めをみわけ 同牝牡見分やうの事	雌雄の見分け方	
11	たねとりやうひでん 鼠種取様秘傳	鼠の交配について	図1点あり
12	ぢねづみ 地鼠之事	野生の鼠について	

『珍翫鼠育艸』は、「鼠の属」などの『養鼠玉のかけはし』上巻で重視された情報が確認できず、むしろ飼育方法や繁殖方法が解説された『養鼠玉のかけはし』下巻のみを独立展開させたような構成となっている。以下、『養鼠玉のかけはし』との差異に注目しながら各項を確認していく。

まず第一項「白鼠之はじまり」では、日本における白鼠の起源が記される。白鼠は黄檗山の隠元禪師によって日本にもたらされ、富や子孫繁栄の象徴として重宝されたことを述べ、最後は「生けるを愛すべき事是にこしたるはなし。よって珍鼠の巻首にあらかじめしるすのみ」と人道的な言葉で締め括っている。ただし、『珍翫鼠育艸』の主眼は鼠の飼育・繁殖にあり、第一項を除く全項がそれに関係する内容となっていることには留意せねばならない。

早速、第二項「諸鼠の異名」では鼠の種類が挙げられる。「今諸人持あそぶ十五鼠の大概」として、ぶち、熊ぶち、ふじ、妻白、くゞり、頭ぶち、藤の筋、むじ、とき、あざみ、月のぶち、豆ぶち、目赤の白、すじ、黒目の白、の十五種の名称が示されている。

続く第三項「諸鼠の絵図」では、前項で挙げた中から、熊ぶち、同月の熊、頭ぶち、黒目の白鼠、豆ぶち、の五種が図示されている。その他の鼠については、「右の外毛色をもつて重宝する所の品々ハ図を除き生ずるの善悪差別を

次々の紙数に譲りしるすなり」と述べている。つまり、本項で取り上げられていない五種の鼠は模様のある種類であり、例示されなかった残りは毛色によって分類されていた鼠で、これらは柄がないため図示しにくかったようである。

第四項「鼠禁にて分置べき心得の事」から具体的に飼育・繁殖の方法が示される。本項では妊娠した鼠の取り扱いが主題とされている。『養鼠玉のかけはし』では「尾終りたる日より。二十日許にハ生むなり。ゆへにつるみ畢て後ハ。牡鼠と禁を異にすべし」と簡潔に記されていたが、『珍翫鼠育艸』では「女鼠たねをうけ候バ腹下りふくれ候て牡鼠をそばへよせず其時心得てさつそくとやを別にすべし」と、妊娠した雌の具体的な描写が加えられている。

第五項「同子を産候て心得とやの事」では産後の注意点が述べられる。鼠が一度に産む子どもの数について、「子の数ハ。多きもの八九子より一二子のすくなきもあり」とだけ記す『養鼠玉のかけはし』に対し、『珍翫鼠育艸』では「始ての子は二三疋より四五疋なり両三度にも及バ、七八疋も生む物なり」と、出産回数によって一度に産む子どもの数が変化することが記される。また小屋は大きめのものがよいことや、鼠が妊娠した際には必ず小屋に藁を入れること、季節により巢立ちの時期が変化することなども『珍翫鼠育艸』新出の情報である。

第六項「豆白豆ぶちの事」では豆鼠の繁殖について述べられる。確かに「養鼠玉のかけはし」においても繁殖についての言及は存在するが、しかし鼠の種類を指定してまでの試みは不在であった。そういった点で本項は新しい。

第七項「同日々并暑寒喰物の事」では鼠の餌について取り扱われている。特に水に関しては、『養鼠玉のかけはし』では「但し米をあたへバ。水を添べし」とされていたものが、「五月すへ六七月頃ハ何になりとも水を多く入置べし春より八九月末に至らバ大根水な青葉のるいを用ゆべし」と、季節ごとの具体的な指示となっている。

第八項「同鼠つよくかふ事」では鼠を丈夫に育てる方法として、川魚やモロコを焼いたものを毎日過度にならないように与えることが推奨される。また、魚を与えることで出産が早まるとも述べられている。『養鼠玉のかけはし』には「生魚生菜等を食べせしむる事くらしからず」とあるが、一方で『珍翫鼠育艸』では「生魚砂糖るいハはなハだわらし」とされ、生魚に対する見解が異なっている。

第九項「鼠喰物の善悪の事」では、餌として与えて良い物と与えるべきでない物が挙げられる。焼川魚、巴豆、塩、青葉は薬とされ、生魚、まちゃん、胡椒、砒霜はつつしむべき物となっている。焼川魚を薬とするのは『養鼠玉のかけはし』の「養鼠病む事あらバ川蝦を炙てあたふべし」とい

う記述に通ずるものがある。

第一〇項「同牝牡見分やうの事」では鼠の雌雄の見分け方が解説される。これは『養鼠玉のかけはし』では全くみられなかった情報である。

さて、「鼠種取様秘伝」と題される第二一項は、『珍翫鼠育艸』の最も特徴的な項である。「鼠種取様秘伝」という見出しのためだけに半丁割いている点に、著者の力の入れようが窺える。「熊ぶちつがい合せ候得バ黒まだらの子出るなり又数生み候内には藤色も出るなり」といった具合に、望む毛色や模様の鼠を得るための掛け合わせ方が七例紹介される。この項はメンデルに先立ち遺伝の法則のようなものを示したとして、先行研究において特に注目されている項である。

続く第二二項「地鼠之事」では、人家に住み着いている棚鼠と、毛色の変わった鼠を掛け合わせてはならないという、掛け合わせに際しての注意点が述べられている。

最後の第一三項「珍鼠之事」では、毛色の変わった鼠を繁殖しようと思うと芸の覚えが悪く、他方、芸を覚えさせると繁殖しにくいとする著者の見解が述べられている。

本項に至るまで、繁殖方法の説明に最も重点が置かれてきたことや、さらに「鼠種取様秘伝」と題して毛色の変わった鼠を得るための掛け合わせが示されたことなどを勘案

すると、著者が珍しい鼠を繁殖することに強い関心を寄せていたことは明白である。『養鼠玉のかけはし』では鼠に芸を仕込むことを飼育の楽しみの一つとしていたが、『珍翫鼠育艸』では変わった鼠を繁殖するためには余計なことであるとみなしているのである。

また巻末には以下のような近刊予告がみられる。

後新選三鼠録

小本一冊  
近日出し申候

紅鼠浅黄鼠藤黄鼠

右たねとり様ひでんくわしく記す

又にげたる鼠よびもどすでん

『珍翫鼠育艸』の続刊と目される『新選三鼠録』は、残念ながら現在までその存在が確認されていないが、「たねとり様ひでん」という謳い文句からは、本書も毛色の変った鼠の繁殖を重視した書物であることが容易に推察される。

いずれにせよ、『珍翫鼠育艸』各項の確認から、その内容構成上の特徴を三点挙げる事ができる。

まず、『養鼠玉のかけはし』に比べ、飼育に関する具体的な情報が増加している点である。これは鼠の飼育の普及に伴い、経験的に飼育の情報が増加したことによるものと

考えられる。

次に、「鼠の属」などの飼育に関係しない情報が大幅に減少している点である。ときに、『珍翫鼠育艸』は鼠の飼育・繁殖に焦点を当てた書物と言えるが、同様に飼育に焦点を当てた本に『花鏡』がある。『花鏡』は陳湊子が一六八八年に中国で刊行した草木禽獣虫魚の培養法を述べたもので、享保四年（一七一九）日本に輸入され、八十五年後の安永二年（一七七三）に平賀源内による和刻本『重刻秘伝花鏡』が刊行されている<sup>30</sup>。『重刻秘伝花鏡』の刊行により、これまでになかった飼育という観点に重きを置く手法が誕生したのではなからうか。『養鼠玉のかけはし』は安永四年の刊行であり、『重刻秘伝花鏡』とは二年しか刊年が離れていない。そのため『養鼠玉のかけはし』には『重刻秘伝花鏡』の影響がみられず、『重刻秘伝花鏡』から十四年後に刊行された『珍翫鼠育艸』にはその影響が色濃くみられるのだと考えられる。

最後に、交配に関する情報が詳細に記されている点である。この特徴は、変わった朝顔などの創作を目的とした園芸が流行したことで周知されるように、「奇品」すなわち珍しいものや変わったものもがもてはやされた当時の流行によるものであろう<sup>31</sup>。こうした状況下で刊行された『養鼠玉のかけはし』に記載された「奇品」の情報が、珍しいも

のや変わったものを求める当時の人々の好奇心を刺激したことは容易に想像される。しかし『養鼠玉のかけはし』においては、意図的な「奇品」の産出を良しとしない著者の態度により、「奇品」についての言及は紹介にとどまる。そこで、十二年後に刊行された『珍翫鼠育艸』では、前に出版された『養鼠玉のかけはし』では満たされなかった、「より珍しいもの」を求める人々の需要を満たすべく、鼠の交配に主眼を置いた内容構成となったと考えられる。

おわりに

本稿では、まず、『養鼠玉のかけはし』を内容構成によって分割し、項目ごとに任意の項目題を付し、目次を作成した上で各項の典拠を搜索した。結果、『養鼠玉のかけはし』上巻は、主に『本草綱目』と『和漢三才図会』を典拠としていることが明らかになった。『養鼠玉のかけはし』の特徴として注目されるのは、飼育に関する情報にとどまらず「鼠の属」にまで言及する点で『本草綱目』や『和漢三才図会』などのスタイルを踏襲していることや、加えて、変わった鼠を紹介するものの、一方で「故意に」変わった鼠を産出することについてはそれを推奨しない著者の態度である。

次に、『珍翫鼠育艸』の内容を項目ごとに確認したところ、

『養鼠玉のかけはし』に比べ、次のような内容構成上の特徴を持つことが浮き彫りになった。第一に、飼育方法の具体的な情報が増加している点、第二に、「鼠の属」の紹介をはじめとする飼育に関与しない鼠の情報が大幅に減少している点、第三に、変わった毛色の鼠を得るための交配に関する情報が詳細に述べられている点である。これらの特徴は、鼠の飼育の普及に伴う情報の増加や、博物学の流行、さらには珍しいものや変わったものを重宝する風潮、といった刊行当時の状況が色濃く反映されているものであると考えられる。

以上、十八世紀後半に刊行された二冊の鼠の飼育書は、十二年という短い期間でその内容構成が大きく変化したことが分かる。『養鼠玉のかけはし』は、『本草綱目』や『和漢三才図会』に記載された古い知識を収集し、またその(百科)事典的なスタイルを踏襲しながら鼠の飼育をごく簡潔に記した書物であった。一方、十二年後に刊行された『珍翫鼠育艸』は、新たな知識を取り入れ、飼育や交配に焦点を当てた書物であった。鼠の飼育の目的が、「愛玩」から資本主義的な欲望に基づく「珍しい鼠の産出」へと変化した点、現代の一部の歪んだ動物飼育のあり方を顧みる際の一つの指標と成り得よう。

注

- 1 寺島俊雄「ミュータントマウスを愛玩した江戸文化の粋」(『ミクロスコープ』Microscopia) 九巻三号、九巻四号、一〇巻一号、一九九二～九三年)。
- 2 上野陽里「十八世紀末に出版された『珍玩鼠育草』—科学と技術、その歴史—」(『京都造形芸術大学総合環境』三、一九九九年)。
- 3 金子之史「『珍翫鼠育艸』」(『香川大学付属図書館報』としよかんだより) 第三五号、二〇〇二年)。
- 4 KURAMOTO, Takashi "Yoso-Tama-No-Kakeshishi: The First Japanese Guidebook on Raising Rats." *Experimental animals*. 60(1), Japanese Association for Laboratory Animal Science, 2011.
- 5 浅野秀剛「橘守国とその門流(中)」(『浮世絵芸術』八三、一九八四年)、一三〇～一七頁。同「橘守国とその門流(下)」(『浮世絵芸術』八四、一九八五年)、一一〇～一五頁。
- 6 安田容子「江戸時代後期上方における鼠飼育と奇品の産出—『養鼠玉のかけはし』を中心に—」(『国際文化研究』第一六号、二〇一〇年)。
- 7 細川博昭「大江戸飼い鳥草紙 江戸のペットブーム」(吉川弘文館、二〇〇六年)、一九二～二〇一頁。
- 8 享保四年卯七月二日付の町触に「覚 樽屋殿而仰渡ハ、何ニ而も生類売買仕間敷候、きりくす松虫玉虫之類、慰ニも飼申間敷由被渡候」とある。『江戸町触集成』(塙書房、一九九四年)、触書二五九七号。
- 9 近世の写本に関しては、その書名を「」で示し、刊本と区別した。以下、すべての写本に同じ。
- 10 重版の度に年号の補入削除などが行われ、松井佳一によってこれまでに八種の異本が確認されている。佐藤常雄「他」編『玉川鮎御用中日記・氷曳日記・松江漁場由来記・釣客伝・金魚養玩草』(農村漁村文化協会、一九九六年)、四四八頁。
- 11 塚本学「江戸時代人と動物」(日本エディタースクール出版部、一九九五年)、二二五～二二六頁。
- 12 例えば、『日本書紀』孝徳紀大化元年冬十二月条(坂本太郎「他」校注『日本書紀』下、岩波書店、一九六五年、二五三頁) など。
- 13 例えば、お伽草子『弥兵衛鼠』(横山重、松本隆信編『室町物語大成』第一三、角川書店、一九八五年所収) など。
- 14 例えば、『枕草子』にくきもの(松尾聰、永井和子校注「訳『枕草子』」(一)、小学館、一九八四年、四八頁) など。
- 15 いわゆる「生類憐みの政策」の一つとして公布された触書(元禄四年「二六九二」一〇月二四日)には、鼠に芸を仕込み見世物とすることを禁止するものが認められる。「覚 一頃日町中ニ而菓売へひをつかひ候者有之、牢舎被仰付候、へひ不限たとへ犬猫鼠等ニ至迄、生類ニ芸を仕付見世物等ニいたし候儀無用たるへし、生類くるしめ不届ニ候、若相背者有之候ハ、急度曲事たるへきよし被仰渡候間、此旨堅相守へし」近世資料研究会編『江戸町触集成』(塙書房、一九九四年)、触書二六九八号。
- 16 今井正編『新版』改訂・増補日本誌—日本の歴史と紀行—(第二分冊)、二二九頁。今井正訳はいわゆるドーム版『日本誌』を底本として作成されており、『日本誌』の草稿である「今日の日本」と所々で異なっている場合がある。したがって



「今日の日本」における該当箇所を確認したところ、今井正訳に問題が無かったためこれを用いた。「今日の日本」原文は以下の通りである。Ratzen und maüse gibts überflügig; diese wißsen sie zahm zu machen, und zu aller hand künste ab zurichten; ist ein plaisir, und Zeit vertreib einiger armen leute, absonderlich in Osaca, welche stadt, ein gemeiner schauplatz ist des ganzen Reiches, wo man allerley raritäten und spiele vor geld zu beschaun findet. (Kaempfer, Engelbert: Werk 1/1, p. 109.)

17 底本には、国立国会図書館蔵『養鼠玉のかけはし』を用いた。  
18 中野三敏氏は上方芝居絵本『翠釜亭戯画譜』(一七五三)の跋文などを記した大雅堂(池大雅)の筆跡との類似を指摘している。(『和本の海へ 豊饒の江戸文化』、角川学芸出版、二〇〇九年、二四頁)

19 原則的に書名、論文名、引用文の表記は底本に従うが、旧字が使用されている場合は現在通用する字体に改めた。以下すべての引用文で同。ただし、『珍翫鼠育艸』という書名に関しては、本稿で主題として扱う作品であるため、底本の表記に従った。

20 寺島良安編『和漢三才図会』上巻(東京美術、一九七〇年)、四五三頁。

21 勝見栄一郎校注『江戸初期和算選書』第一巻(三)(研成社、一九九〇年)、一四二頁参照。

22 前掲「江戸時代後期上方における鼠飼育と奇品の産出—『養鼠玉のかけはし』を中心に—」。

23 前掲『和漢三才図会』上巻、四五三頁。

24 現在では鼠と分類されない黯(モグラ)や鼯鼠(ムササビ)や、

火鼠などの想像上の動物が、当時は鼠の一種であると考えられ、『養鼠玉のかけはし』ではこれらを一括して「鼠の属」と称している。

25 池田正樹「難波嘶」前篇卷之参(森銃三「他」編『随筆百花苑』第一四卷、中央公論社、一九八一年、七五頁)。

26 百井塘雨「笈埃随筆」卷之一(日本随筆大成編集部編『日本随筆大成(第二期)』一二、吉川弘文館、一九七四年、一二頁)。

27 小野佐和子「江戸時代における園芸植物の流行について」『造園雜誌』四八(五)、社団法人日本造園学会、一九八五年、五五—六〇頁)。

28 天保八年(一八三七)二月十四日付書簡(高橋敏『家族と子供』の江戸時代 娯と消費からみる』、朝日新聞社、一九九七年、六〇頁)。

29 底本には、甲南女子大学図書館上野文庫蔵『珍翫鼠育艸』(青木国男「他」編『博物学短編集』上、恒和出版、一九八二年所収)を用いた。

30 上野益三「本草綱目と日本の博物学」(『甲南女子大学紀要』(七)、一九七一年、一五三—一六三頁)。

31 前掲小野佐和子「江戸時代における園芸植物の流行について」。